

3. 摘 要

1. 比較的長期貯蔵(11月処理)の場合は, *MH*, *Belvitan K*, *CL-IPC*等従来の結果に比べて呼吸の抑制程度が比較的少く, 糖含量が高く, 澱粉含量低く, 著重減少歩合並びに皺が多く, エソが発生した. なお植付け

た場合の萌芽性は無処理区より悪くなる.

2. 比較的短期貯蔵(4月処理)の場合はほぼこれらの欠点が除かれ, 当地帯において新しいものが出廻る6~7月頃までの萌芽抑制を対象として3~4月頃塊莖100kg当り成分0.1~0.2g処理の実用性が認められた.

りんご台木 *East Malling* の繁殖試験

土屋七郎・村上兵衛・吉田義雄

(園試盛岡支場)

最近果樹の結果年限の短縮と省力の必要から矮化台の研究がとりあげられはじめたが, この試験を実施するにあたり, 台木を導入してこれを速かに繁殖する必要がある. 本試験はこの種の台木における繁殖の常法とされる取木法による *East Malling* 系統の繁殖を試みたので, ここに参考までに紹介する次第である.

1. 材料と方法

北海道大学より導入した *East Malling* の各系統, I, II, IV, V, K, XII, XIII, XV, XVIをマルバカイドウおよびミツバカイドウに芽接し, 各系統の苗木を作り, 接木後2年目および3年目に取木を行つた.

芽接実施は1957年8月, 1台木に2芽を接いたが2芽活着したものは1芽を残し他はとりのぞいた. 1958年11月, 苗圃にEM, Kの苗木を移植し, 1959年4月, 苗木の列に沿つて巾60cm, 深さ15cmの溝を切り, これに苗木を婉曲させた. 5月中旬各側枝が10cm位伸びた時に先端2~3葉位出るように第1回目の土入れを行つた. 以後10cmの伸長を待つて土入れを行い, 7月中旬までに4回実施した. 総覆土は約30cmである.

11月に覆土を除き苗木1樹当りの台木生産を調査した. EM, K以外の系統は翌年2年生苗木で同様の方法で試みた.

尙EM, Kについては親株を用いて盛土法も試みた.

2. 結 果

第1表には各系統の生産量を示した.

EM, Kは芽接後2年目, 即ち1年生苗木を用いたが非常に繁殖率が高く, 最も繁殖しやすい系統であることが伺える. このことは親株を用いての盛土法によつても証明している.

2年生苗木についての比較ではEM, II, IV, Vは取木数少く, やゝ繁殖しにくいように見うけられ, EM

XII, XIII, XVIは繁殖容易であつた. 尙XII, XIII, XVIのごときものは側枝が多く発生したので多量の台木が得られたものと考えられる.

第1表 取木1年目における台木の生産量

系統番号	供試数	取木数	1本当り取木数	備 考
EM・I	4	19	4.8	2年生苗木
EM・II	8	17	2.1	'
EM・IV	1	2	2.0	'
EM・V	3	5	1.7	'
EM・K	18	94	5.2	1年生苗木
EM・XII	7	66	9.4	2年生苗木
EM・XIII	4	48	12.0	'
EM・XV	2	12	6.0	'
EM・XVI	10	107	10.7	'
EM・K	6	52	8.7	1年生台木
EM・K	1	21	21.0	親 株

発根は取木実施当年の掘り上げ時においてEM, XII, XIII, XVIがやゝ少いように観察されたが, 他はかなりよく発根しており接木可能な太さの台木を得ることが出来た.

1年生のEM, Kの台木6本を用いて実施した際に得られた台木の生育を第2表に示めたが, 基部に発生したのも先端部に発生したのも生育に大差がなく, よく揃つたものが得られた.

第2表 台木の発生部位と生長量との関係(EM・K)

発生部位 樹体番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	平均
1	57.5	54.0	20.0	52.0	68.5	18.5	56.0	47.0				46.7
2	46.5	48.0	29.0	51.5	49.0	58.5	62.0	35.0	50.5			47.8
3	58.5	41.0	47.0	55.0	26.5	48.5	50.5					46.7
4	56.5	54.0	58.0	40.5	28.5	50.0	51.5	36.5	46.5	56.5		47.9
5	35.5	20.5	47.5	42.5	54.0	38.5	31.0	36.0	43.0	32.5	21.5	36.5
6	41.5	60.5	48.0	47.0	51.5	41.0	50.0					48.5
平均	49.5	46.3	41.6	48.1	46.3	42.5	50.2	38.6	46.7	44.5	21.5	43.3

論 議

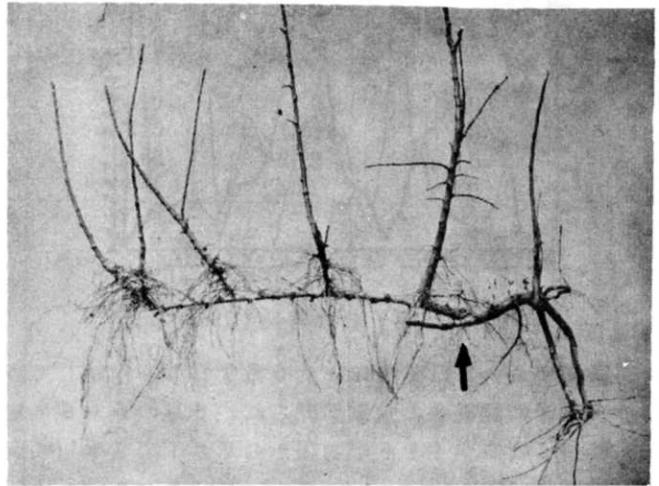
本試験において従来我国で行われていない取木法並びに盛土法による台木の繁殖を試みたが、容易にしかも発育良好な揃った台木の得られたことが知られた。

繁殖方法としては挿木、取木、株分け等いろいろあるが、勿論本邦で広く用いられ、かつ挿木の容易なマルバカイドウに比較すれば多少労力を要するが、導入された貴重な台木から早期に多量の個体を得るためにはここで実施した方法が適していると思われる。

EM系統の繁殖の難易については欧米並びに最近の青森県りんご試験場における結果と大体一致するが、Kについては一般に他の系統に比較して繁殖力が劣るとされており、当結果と一致しなかつた。

このことは強勢な台木に接いだことによつて生育の旺盛な苗木が得られ、側枝の多数の発生をみたことによるものと考えられる。

今后は他の方法による繁殖法を検討するとともに、その能率的方法についても検討したい。



りんご「斑点性落葉病」の初期防除の効果について

大 泉 康

(宮城県農試)

1. ま え が き

本病の防除については、農薬の探索が行われているが、なお防除効果の充分と思われる薬剤は見出せない。

この場合、農薬の探索も必要であるが、重点とすべき防除時期を考へて、蔓延時での病原密度の低下を計ることが考へられ、以下発生消長調査及び薬剤防除試験から、重点防除時期について検討した。

2. 試 験 方 法

実験1 発生消長調査

普通栽培の印度圃場を用い、殺菌剤の散布は省略した。(1961年及び1962年)

1. *Alternaria* 属菌の孢子飛散消長調査

高さ150cmの簡易孢子採集器(1基スライド4枚収容)2基を設置('62年:3枚収容)。1日おきに、18×18mm内の孢子附着数を調べた。

2. 葉上病斑の発病消長調査

3樹について、1樹当り15新梢を任意抽出し、病葉及び病斑数を調べた。

3. 果実への侵入時期調査

防菌二重袋を用い、5月15日から8月24日まで10日間隔の防除法により調べた。

実験2 防除試験

1. 初期防除と後期防除との関連について

スターキング・デリシヤス(5年生)を用い、落花後から落花30日後迄、5月16日、26日、6月7日の3回水銀剤及びフアーバム剤を散布し、以後6月6日19日、7月3日、12日、27日、8月16日の5回、4-12式濃厚ホルドー液を散布した。

3. 結果及び考察

実験1 発生消長調査

1. *Alternaria* 属菌の孢子飛散

'61年においては、第1図に示す通りである。5月7日より検鏡しているが、すでに孢子の飛散が見られ、降雨につれて増すが、6月中旬に第1回目のやまを作っている。のち7月下旬から8月上旬にかけて飛散は頂点に達している。8月後半少くなるが、9月中旬、3回目のやまが見られる。